HIROKO　MATSUURA

アメリカ人と日本人がほめ行動を起こす可能性の度合いについて比較した。彼らはブラウン＆レビンソンの唱える積極的ポライトネス文化と消極的ポライトネス文化にそれぞれ属すると言われている。日米各44名の大学生を対象とした質問紙による調査を実施したところ、以下の4つが相違点として浮かび上がった。一点目は、アメリカ人のほめ行動では対話者間の親疎関係がほめの出現に影響を及ぼしてたのに対して、日本人ではウチ・ソトの区別が強い影響を持っているということである。一般的には日本人は家族に対して丁寧ではないが、アメリカ人は対話者との距離が近いほど相手をほめようとする傾向が強くなる。二点目は、ほめ行動を起こす可能性の男女差はアメリカ人のほうが日本人に比べて大きいことが挙げられる。三点目は、アメリカ人のほめにおいては相手の地位や力がその行為を妨げる要因となりがちであるが、日本人の場合は相手との精神的距離が地位や力関係に優ることがある点である。最後に、アメリカ人は相手を褒めることは比較的たやすいことfらると感じる一方で、日本人は褒めを難しいものと考える傾向があった。

中間言語語用論における研究法論の再検証

ー中間言語による、動的体系としての中間言語の測定ー

伊藤恵美子

キーワード：**中間言語、研究方法論、動的な言語体系、滞日期間による分類**

**要旨**

学習者の代に言語を分析する場合、目標言語にどれだけ近づいているかという観点から、目標言語と比較する方法が一般的である。また学習者が順調に習得されない場合、その原因を学習者の母語に求めることが多い。しかし、学習者の言語、すなわち中間言語は学習者の頭の中にあるシステムであり、時間の経過に伴って変化していくものである。したがって中間言語を情的にとらえて目標言語と比較しても、中間言語の連続する変化を詳細に解明することはできないと思われる。そこで本稿は目標言語や母語と比較するのではなく、中間言語それ自体を複数のステージにおいて分析することにした。

　調査は談話完成テスト（Discourse Completion Test）を用い、日本では高等専門学校に在籍するマレーシア政府派遣留学生（来日3年目115名・来日2年目103名・来日1年目75名）、マレーシアでは日本留学予定のマラヤ大学の大学生80名、合計373名の有効回答を得た。　分析の結果、来日3年目の学習者グループと来日2年目の学習者グループの間では統計的な優位さが見られなかったのに対して、来日3年目の学習者グループと来日1年目の学習者グループの間では5%水準で、来日3年目の学習者グループと滞在経験のない学習者グループの間では0.1%水準で統計的な有意差が見られた。よって、学習環境が学習者の語用的能力習得に関与したと推測される。

　中間言語の本質を鑑みれば、連続体である中間言語を便宜上、複数段階に分けてその差異を検討していくことは理に適うだろう。つまり、有路店の中間言語を詳細に分析するためには、中間言語を総体的にとらえて隔たりの大きい目標言語と比較するよりも、中間言語を発達の段階で細分化して、ある段階の中間言語と段階が一つ異なる中間言語と比較するほうが今まで表出されなかった事象を検出することができ、妥当なのではないかと考える。

「世界の日本語教育」15、2005年11月

要旨

　異なる文化は、適切な行動や丁重さについて、異なる理解と解釈する。そのため、異文化間コミュニケーションには、意思疎通がうまくいかないことがありうる。語用の転移が生じるのは、母語話者（例えば日本人）が目標言語（たとえば英語）で話しているが、話されている言語の文化に合った対応をせず、自国に会話のやり方で対応するときである。特に断る場面ではそれが起こりやすいと推測される。この論文では、12の場面において日本人とアメリカ人の断り方の違いを較べる。日本人が同じ場面において、日本語で断る場合と英語で断る場合に違いがみられるか否かを調べ、語用の転移があるか否かを考察する。そのため、Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz(1990)が行った、談話を完成する形式の質問に答える方法を用いてその結果を比較考察する。また、日本人の英語力やアメリカでの滞在期間の長さ、あるいは英語での断り方を教室で教えられたか否かが、日本人の英語での断り方に影響しているかどうかも考察する。